

佳作

当たり前じゃない感動

京都府 大山崎町立大山崎中学校三年 辰巳 絢香

「当たり前が幸せと知った。」

これは『群青』という合唱曲の歌詞の一部である。三歳上の姉が、中学二年生の文化祭で、伴奏を担当した曲だ。私はよくその練習に付き合わされていたせいか、歌詞を完璧に覚えていた。以前たまたま姉がこの曲を弾いていた時、私はふと思いついたのだ。……

それは二〇二〇年二月二十七日のこと。

「全国すべての小学校、中学校、高等学校、特別支援学校について、来週三月二日から春休みまで臨時休業を行うよう要請します。」

これを聞いた四日後に、当り前の日常が閉ざされるだなんて、考えたくもなかった。でも従わざるをえなかった。

その当時、私は小学校六年生だった。卒業を間近

にして、友達と過ごせる限られた時間を大切にしなければと思っていた矢先の出来事だった。絶望でしかなかった。結局、私は卒業式の日まで一切小学校に行くことができないまま、小学校生活は幕を閉じた。卒業式は行われたものの、規模は縮小され、卒業証書をひとりひとり受け取ることも、『旅立ちの日』を歌うことも、例年ならしていたはずだったことが一切できなかった。悲しくて悔しかった。

その後中学校に入学しても、休校を余儀なくされた。教室にクラスみんなが集まることすらできず、大好きなテニスも思うようにできず、もどかしさでいっぱいだった。慣れないオンライン授業にイライラしたこともあった。両親は仕事に行き、姉と弟は同じくオンライン授業を受けていたため、日中は誰とも話すことができず、ただパソコンに向かって、淡々と進んでいく授業を受けるのはなんだか寂しかった。休み時間や昼休みに友達と楽しく会話したり、行事のために放課後残って準備したりなど、思い描いている中学校生活ができないまま、卒業を迎えてしまうのではないかと。そんな私は今、中学三年生になった。クラス全員が同じ教室で授業を受けられるようになったり、部活動の制限が緩和されてテ

ニスの大会に出場できるようになったり、文化祭や体育祭が開催されたり、少しずつ以前の日常が戻ってきた。今までは当たり前だったことなのに、私の心は幸せと感動でいっぱいになった。

私は思う。今こうやって生きられていること自体が幸せなのだ、と。だから「当たり前」を「当たり前」だと思っただけじゃない。家族がいて、友達がいて、美味しいご飯が食べれて、勉強できる環境が整っていて……。『当たり前』の価値は、計りきれないものだ。これからもずっと、「当たり前」が「当たり前前」にできる幸せを噛みしめて生きたいと心底思う。毎日の「当たり前」にありがとう。